

別紙 4

報告番	※	第
-----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

改革開放期の中国における学力観の変化に関する研究
—高等学校歴史科を例として

氏 名

秦 東興

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、1970年代末以降の改革開放期における中国の学力観の変化を考察する。中国では、日本の「学力」、「学力観」に相当する語彙がないが、学力の意味が含まれる研究は、例えば、「知識」、「能力」、「意欲」などの学力に含まれる部分に関する研究は少なくない。小中高校の教学大綱・課程標準には、「知識」、「能力」、「情感・態度・価値観」という3つの側面の育成目標が規定されており、それは日本の広義の学力観に対応するものだと考えられる。そのため、本研究では、広義の学力観の視点から、中国の学力観の変化を考察する。

本研究では、高等学校の歴史科を例として学力観の変化を探究する。それは、(1)高等学校の教育は、人材育成の重要な段階として中国の教育理念を鮮明に表してお

り、(2) 歴史科は他の科目に比べると、社会情勢の変化をより敏感に反映すると考えられるからである。かかる点から、本研究では高等学校歴史科を例として、学力観に焦点を当て、中国改革開放期における教育改革と発展の過程を明らかにする。カリキュラム改革は基本的に、教学大綱・課程標準の改訂、それに基づく教科書の改訂、大学入試の改革という手順で進められる。本研究では教学大綱・課程標準の改訂によって、改革開放期のカリキュラム改革過程を「Ⅰ期：1970年代末—1990年代初め」、「Ⅱ期：1990年代半ば—2000年代初め」、「Ⅲ期：2000年代初め—現在」の3つの時期に分けて考察する。第1章、2章、3章では、それぞれⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期における高校歴史科の教学大綱・課程標準、教科書、大学入試問題を分析し、育成目標、教学内容、大学入試内容の変化を明らかにする。そして、国家の学力観の全体的な変化および各時期の特徴を把握する。続く第4章では、各時期における学校現場の教師と生徒を対象として行ったインタビュー調査から、教育現場の学力観と生徒の学力実態の変化及びそれと国家の学力観との関係を明らかにする。

第1章では、教学大綱、教科書、大学入試問題の分析を通して、Ⅰ期の学力観を明らかにする。Ⅰ期の教学大綱は、歴史科の基礎的な知識、および「共産党熱愛」、「革命伝統の教育を実施する」などの政治思想の育成を目指す内容が特徴的である。教科書のスタイルと内容には、基礎的な知識の習得と政治思想の育成に利するよう設計されたものが見られる。入試問題のスタイルと内容は、基礎的な知識と政治思想の考査に重点が置かれている。Ⅰ期の学力観は、基礎的な知識の習得とイデオロギー色彩を持つ政治思想の育成を重視するものであることを明らかにした。

第2章では、Ⅱ期の高校歴史科の教学大綱、教科書、大学入試問題の分析を通し

て、この時期の学力観及びⅠ期のそれとの相違点を解明した。Ⅱ期の教学大綱では、歴史知識を利用して分析、概括、思考、問題解決する能力、および経済発展に力を尽くす覚悟の育成が強調された。教科書のスタイルと内容には、能力育成の強化、イデオロギー色彩を持つ内容の削減、客観的な内容の追加などの特徴が見られた。また、大学入試問題は、知識を活用して問題を分析解決する能力、歴史事件の発展過程と規律、文化史内容に関する考査が重視されるようになったことがわかる。Ⅱ期の学力観は、知識を活用して問題を解決する能力、改革開放・社会主義現代化建設に力を尽くす意識の育成を重視するものであることを明らかにした。

第3章では、Ⅲ期の高校歴史科の課程標準、教科書、大学入試問題の分析を通して、この時期の学力観およびⅠ期、Ⅱ期のそれとの相違点を明らかにした。2003年の課程標準には、実践能力、革新能力、協力学習・探究能力の育成、及びヒューマニズム精神、多元文化の理解と尊重、健全な人格の養成に関する目標が追加された。それに基づいて、教科書のスタイルと内容には、生徒の学習意欲を促進し、独自思考、実践、協力探究の能力を向上させ、国際意識を形成させ、ヒューマニズム精神、健全な人格を養成することを意図して編集されてきた。大学入試問題のスタイルと内容は、生徒の自ら思考、分析、問題解決能力の考査を重視し、多文化の理解と尊重、中外関連の国際意識の形成が考慮されるようになった。Ⅲ期については、生徒の実践と革新能力、学習意欲、健全な人格の養成を目指す学力観を明らかにした。

第4章では、学校現場の教師と生徒に対するインタビュー調査を通して、教育現場の歴史教学と生徒の学力実態、およびそれと国家の学力観のずれを明らかにした。まず、能力育成の視点から見れば、教学大綱・課程標準、教科書、大学入試問題の分析を通して、三つの時期における能力育成の目標、方法などは異なっていること

が明らかになった。それに対して、学校現場ではⅠ期とⅡ期における歴史教授と生徒の学力実態には、明らかな相違は見られておらず、授業と教科書の内容を生徒に詰め込むことが重視され、生徒の分析概括、問題解決、独自思考などの能力がすべて非常に低いレベルに止まっていた。それに対して、Ⅲ期の歴史教授には、知識を活用する能力が重視され、生徒の自らの分析、思考、判断などの能力も向上した。情感・態度・価値観の養成という視点から見れば、教学大綱・課程標準、教科書、大学入試問題の分析を通して、三つの時期における情感・態度・価値観の育成目標は異なり、その中でⅡ期とⅢ期の育成目標が近いことがわかった。だが、それに対して、生徒の情感・態度・価値観の実態は、その育成目標と一致しないと考えられる。愛国情感には明らかな違いが見られず、三つの時期における生徒は基本的に同じ愛国情感・民族の誇りを持っていることがわかる。一方、生徒の世界意識・国際意識と個人人格の形成は、育成目標の変化とは一致せず、Ⅰ期とⅡ期のそれがより近いものであり、学力観と教育現場の学力実態とのずれが見られることを明らかにした。